

【東京】「広い視野で医療を見つめたい」慈恵医大教授が総合大学教員を務めた理由-繁田雅弘・東京慈恵会医科大学精神医学講座教授に聞く◆Vol.1

首都大学東京に14年在籍し学部長や副学長を歴任、その後母校へ戻る

2023年9月1日（金）配信 m3.com地域版

「治療する意味を問わない医療でいいのか」――。1983年に東京慈恵会医科大学を卒業した繁田雅弘氏は大学勤務を続けるうち、医師として「壁にぶつかった」。そんなときに決断したのが、総合大学教員という選択。首都大学東京に14年在籍し、学部長や副学長を歴任。2017年に母校に戻り、精神医学講座の教授を務める繁田氏は総合大での経験が「すごく今に生きている」と話す。珍しいであろうキャリアを持つ繁田氏にその背景を聞いた。（2023年7月7日インタビュー、計3回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)

▼第3回は[こちら](#)



繁田雅弘氏

――東京慈恵会医科大学のホームページによると、繁田先生は同大の教授に就任する前、「総合大学の運営に携わった」とあります。経歴に目が留まりました。

私は1983年に東京慈恵会医科大学を卒業後、海外での研究員生活などを経て、1995年に同大精神医学教室の講師になりました。総合大学である首都大学東京（現東京都立大学）に移り、健康福祉学部の教授・学部長に就任したのは2005年です。首都大学東京は都立の四つの大学が統合して同年に設立しましたが、私は前身大学の一つである都立保健科学大学の教授に2003年に就任し、首都大学東京の開学後もこちらに在籍しました。首都大学東京では2010年まで学部長を務め、2011年からは副学長を担いました。その後、2017年に慈恵医大に戻り、精神医学講座の教授に就任しました。

――長期にわたり総合大学に身を置いたのですね。医学部の教授としては珍しいキャリアではないでしょうか。

そうかもしれません。首都大学東京に移った直接のきっかけは、同大が大学院を開設するに当たり、博士課程の指導を担える人材を探していたことです。人を通じて私に相談がありました。

当時、私は自分の身の振り方を考えていました。それまで22年にわたって慈恵医大に在籍していたわけですが、「このまま単科大学にいても視野が広がらないのではないかと危惧していました。私が携わる精神医学は社会学や哲学、人類学などとも関係が深い分野ですが、医大はその特性上、医療技術の進歩を追求する傾向があります。「そもそも、なぜ治療をするのか」「この患者さんにこの治療をして本人は幸せになるのか」といった問いを立てる

ことは少ない印象を受けていました。精神科という私の専門性が影響しているように思いますが、大学勤務を続けるにつれて、先述したある種の医学の限界のようなものや、もっと社会的な活動をしたい思いが増していきました。

——首都大学東京での教員生活はいかがでしたか。

充実していましたし、他分野の人との交流などを通して、自分の中で医学を相対的に捉えられるようになったことは大きかったと思います。精神医学と関連のある学問に間接的にせよ触れることで、それまでよりも広い視野で医療を見つめられるようになったのではないのでしょうか。他分野の先生方と共同研究や学会などの場でディスカッションする機会もあり、面白かったですね。「ずっとここでもいいな」と思っていた時期もありました。

——その後、先生は慈恵医大に戻ります。

2014年度で副学長の任期が終わってから、「先々は再び医師として現場に」という考えが生まれていました。現実的に大学にはもうポストがないだろうと思っていましたし、私は臨床に自分の存在意義があると感じていました。認知症の人が病気を抱えながらどれだけ自分のことを語れるかに興味があったんです。「医師の対応次第で、患者さんは思った以上に自分のことを表現できるのではないか」と考えていました。

そんな方針に変化が生まれたのは、2016年の冬です。10月ごろに退職届を出して次の勤め先を探そうとしていたころ、周囲の人から次のフィールドとして「慈恵はどうか」と打診されました。尊敬する先生はこうも言ってくれました。「繁田君は気付いていないかもしれないけれど、君は本当は人に教えるのが好きな人間なんだよ。大学が合っているよ」と。

食指が動きました。「もしかしたら、医学を相対化した視点があるからこそ、伝えられることもあるかもしれない」「患者さんを治療する意味や意義を学生や若い先生に考えてもらいたい」。教育への関心が高まってきました。

——振り返って、総合大学での経験は医大での教育に生きていると思いますか。

すごく生きています。先述した視野やものを見る視点がそうですし、組織運営を考えるうえでも首都大学東京での経験は参考になりました。私が副学長を務めていたときの学長は電気工学やロボット工学を専門とする原島文雄さん（任期は2009～2014年度）であり、彼は米国での活躍が長く、感覚がとても欧米化されていました。

「女性幹部がこんなに少ないのはおかしい」。近年になって問題視されるようになりましたが、当時から原島さんは日本の組織構成に疑問を持っており、女性教員を積極的に登用しつつ、女性が働きやすい職場づくりや子育て支援に取り組みました。「女性が増えると産休・育休が影響して短期的には組織の力が弱くなると思うかもしれない。でも、長期的に見れば魅力的な人材が増えることで組織により深みが出て、成熟するだろう」。こんなメッセージを発する彼を私は副学長としてそばで見っていました。

「希望があればどうぞ子どもを産み、育ててほしい。そして、成熟した女性医師としてカムバックして、また患者さんを支えてほしい」。慈恵医大に戻った後、私も医局内で折に触れて職員に伝えました。当直や日勤、外来コマ数の調整を提案するなどして、出産や子育てをした女性医師であっても出世を諦めないで済むよう、働きかけてきました。現時点では私がまだ新たな組織運営に慣れておらず、スタッフに負担をかけることもありますが、中には出産を経て正規のポストに戻った人もいます。

◆繁田 雅弘（しげた・まさひろ）氏

1983年東京慈恵会医科大学卒。1995年同大精神医学教室講師。2005年に首都大学東京（現東京都立大学）健康福祉学部の教授・学部長に就任し、2011年からは副学長を務めた。2017年に慈恵医大に戻り、精神医学講座の教授に就任。日本認知症ケア学会理事長など。

【取材・文・撮影＝医療ライター 庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

